

シンポジウム

児童虐待防止の家族サーベイランスという視点から

山本春江（青森県立保健大学）

児童虐待は、いのちにかかわるような心身の攻撃それ自体も重要で緊急に対応すべきことですが、そのあとの心的外傷を負って長い人生を歩まなければならないことの方が重要だといわれています。虐待の期間は短くてもその傷は簡単には修復しないことが多いからです。被虐待児が親となり虐待を繰り返すという、世代間伝播についても被虐待児が親となり子どもを産み育てる、その姿まで視野に入れて描かなければならないと思います。私は今までかかわってきた虐待事例を通して、家族サーベイランスの必要性を実感しています。

保健・医療・福祉の「連携」では十分とはいえません。これまで報道された虐待事例はそれを如実に物語っています。「ネットワーク」でも同様です。なぜなら「ネットワーク」は目的が一致しているところに寄り集まってできる組織体だからです。本来個人的で柔軟なつながりを特徴とするからです。ですから、公的な組織網とするにはおのずと限界があります。事の重大さとは無関係にいつつながりが切れても不思議ではないというリスクを負っています。しかも、虐待の家族はしばしば個人的な包囲網はもとより、地域の包囲網をくぐりぬけていきます。

家族サーベイランスとは、「児童虐待や家庭内暴力などの早急に対応が必要な家族問題について、情報を集め、解析し、評価し、迅速に、かつ継続的に家族を見守るシステム」とイメージしています。サーベイランスそのものは「監視する」という意味であり、疫学上では「有効な対策を樹立するために、疾病の発生と蔓延に関与する全ての面を継続的に精査することである。」と定義されています。つまり、「サーベイランスとは、病気あるいは異常発生の情報をいち早く集め、それをすぐ解析し、評価し、す早く具体的な行動に移す一連のシステム」といえます。

当日は、今までかかわってきた虐待事例を通して、家族サーベイランスの視点から、家族のニーズに応じていくためにどうあればいいのかを一緒に考えていきたいと思っています。